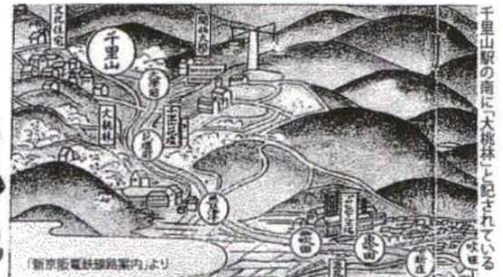


千里の桃のはなし

下の冊子は朝日新聞千里販売店(株)(岡野和博氏)が、毎月1回、千里山、千里ニュータウン一帯に朝日新聞を配布する際、付録のように配られているものです。縮小したので少し読みづらいですが、老眼鏡をかけしつかりお読みください。なかなか面白いお話です。

千里の桃のおはなし

桃の付く地名は桃山台だけじゃない?その昔、千里は桃の名産地でした。しかも「一目千本」の桃を求め、大阪から花見客がやって来る一大観光地だったんです。桃の節句にちなみ千里の桃をひも解きます。



● 気になる「桃」地名のワケ

千里に竹が多いから竹見台、それはわかります。でも「桃山台」はなぜ?それは、かつて千里が広大な桃林だったことに由来しています。千里の桃は、江戸末期に河内の国稲田村(今の東大阪の一部)から「稲田桃」の苗が持ち込まれたのがはじまりです。

まず垂水村(豊津駅そば)の山に植えられ、明治の初め頃には今の関大前、千里山、春日、桃山台辺りに広がりました。(右地図)

● 桃にピッタリ!千里の土地

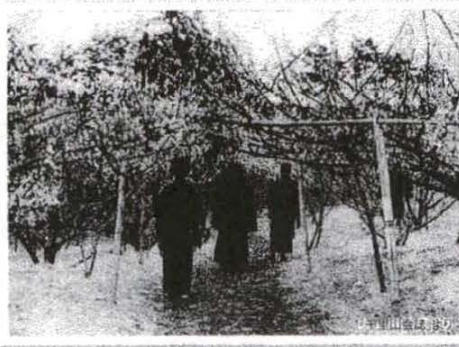
では、なぜ桃が千里に植えられたのでしょうか。千里丘陵の土地は乾いた砂や小石が中心で、赤松やツツジがところどころ生える程度でした。しかも、大きな川が無く水田には向きません。そこで、農作物として桃(と竹)が植えられたのです。また、桃は輸送中に傷付きやすいので、消費地である大阪の町に近いのもメリットでした。



「一目千本」と呼ばれた垂水の桃林

● 「一目千本」吹田の桃見

「小ぶりだけど甘い」と評判になった千里の桃は、花見でも有名になります。春には大阪から大勢の花見客が押し寄せました。桃林の美しさもさることながら、緩やかで歩きやすい地形も好まれたようです。掛茶屋や、酒、食べ物を出す店、三味線



河田山(こうたやま=今の千里山駅西側)の桃見

弾く女性も出て大変賑やかでした。これが「一目千本」といわれた吹田の桃見です。

● 千里の桃大ピンチ!

しかし大正初め、害虫の大発生により千里の桃はほぼ壊滅。桃をあきらめ、タケノコ栽培に変える農家が増えました。さらに、大正10年からはじまった千里山の宅地開発も影響し、千里の桃はどんどん衰退していきます。

千里山の開発とともに開園した遊園地「千里山花壇」(後の千里山遊園。今の関大前駅東側)も、当初は桃花(秋は菊花)をメインにしていたよう



ですが、大正15年には桜を全国に植えるなど、少しずつ桃以外の花にシフトしていったようです。昭和に入ると戦時の木材供出もあり、ますます千里の桃は失われていきます。

● 幻の地名「桃園町」

千里の桃が最後まで栽培されたのは、千里山竹園、春日辺りのようです。千里山駅と春日を結ぶ急カーブの坂道に「ももぞの遊園」がありますが、かつて「桃園町」という通称地名があった名残ります。

● 伝統果物に...

現在、各地で伝統野菜の復活が盛んです。東大阪では「稲田桃再生プロジェクト」が取り組まれています。吹田でも「千里の桃」を再生させれば、「吹田くわい」とともに名物として愛される日がやって来るかも知れません。



稲田産に現存する稲田桃

●参考 ● 文献:『千里山会誌』、『千里山70年のあゆみ』、『大阪の北部と北大阪』、『在井寺村誌』、新大阪電鉄線沿線のWt.:『平河社会の探索』、河田山遊園沿革/ひと:奥野武さん、のら猫庵金店主人、奥田隆一さん(千里山会)、和田勇九さん(千里山会):1998年御逝去。京大卒業、京阪電線入社、大城千鶴電線専任。後半生を御主人・紀土史家として千里山人と号し、千里山の貴重な御土史家を継いだ。